景観を教材とした美術教育の一例

上原一明・楊　孟哲※・福田隆眞

Scenery as Teaching Materials in Art Education

UEHARA Kazuaki・YANG Mong-che・FUKUDA Takamasa

(Received September 28, 2007)

はじめに

現在のわが国の教育課程では、総合的な学習の時間の一つの題材として環境教育が例示されている。それは、身近な環境から地球的規模までの環境問題を考える契機として導入された題材であり学習である。美術教育においても、教育課程において、中学校に環境のデザインが学習内容に採りいれられた経緯もあるが、現在では小学校図画工作科も中学校美術科も授業時間数が削減されて、環境のデザインを扱う余裕がないのが現状である。

筆者の一人福田は既に環境や野外彫刻にかかわる教材について報告をしてきた。それらは①「環境造形と美術教育についての一考察」(「アートエデュケーション Vol.12 No.3」、建帛社、1990)、②「山口大学通りの景観調査について」(山口大学教育学部研究論叢第44巻第3部、1994)、③「一の坂川の景観と視覚的要素について」(山口大学教育学部研究論叢43巻第3部、1995) である。①では山口県宇部市の野外彫刻と学校内での立体造形の制作、保守等について述べ、環境と造形の関係を述べた。②③は山口市内の景観調査を行い様々な景観の要素が与える視覚的要素について具体例をあげて述べた。

こうした一連の美術教育における景観を対象として教材研究として、本稿では、台北と北京における歴史的な建造物を有する景観を採りあげる。台北では三線道路の歴史的な景観と現存する歴史的建造物をとりあげて、その経緯を試考する。また、北京では「北京798アート・ゾーン」をとりあげて歴史的建造物の再利用という観点から景観の教材を紹介する。

1．景観を対象とした美術教材

美術教育の教材としての景観は、小、中学校で教材化することに困難な一面を持っている。それは、景観を構成する要素が複雑で、要素を整理したり景観を見る観点を設定したりしにくい面があるからである。しかし、中等教育レベルでは、身近な街並みや景観を教材として取り扱うことで、環境への親和的態度を育成したり、歴史的な事物に触れることによって地域への理解を深めたりすることができる。

景観の調査としては、まず、視覚的構成要素から進めることができる。景観や街並みの構成に関して芦原義信は次の９つをあげている。(注1)

① 街路と建築の関係

② 街路の構成

※台湾・国立台北教育大学准教授

③ D／H幅と高さの比率
④ 広場の美学
⑤ 入り隅みの空間
⑥ カンクン・ガーデンの技法とインメディアシーの原理
⑦ 建築の概観の見え方に関する考察－第一次輪郭線と第二次輪郭線－
⑧ 俯瞰景－見下ろすことの意味－
⑨ 野外彫刻のありかたの意味

こうした景観の構成要素を基に、一の坂川を事例として視覚的要素の調査を既に行ったが、そこでは要素を次のように設定して分析を行った。

① 家屋、建築物、外壁
② 川、橋、水
③ ストリートファニチュアー
④ 並木、街路
⑤ その他の問題点

このような具体物をとりあげて景観の中の視覚的要素を分析することによって、一の坂川が地域に密着した親和的な風景となっていることを明らかにすることが出来た。(注2) こうした教材研究の一環として、視覚的要素に加えて歴史的建造物の現代社会での調和、また、歴史的建造物の現代社会での再利用という観点で、次章では、台北と北京を事例として述べる。

2．台湾の日本統治時代の歴史的建築と教材

（1）はじめに

ここでは景観の教材の一例として、台北の三線道路を取りあげる。台北市内には歴史的建造物が比較的多く残っている。それらの建造物には日本統治時代からの歴史的な意味が付与されており、景観を視覚的な要素だけで捉えることはできない。身近な環境における歴史的な建造物を目にする時、私達はそこに歴史的な経緯や由緒に興味を持つ傾向にある。また現存する歴史的な建造物について、現在の利用内容にも興味を持つものである。こうしたことから、ここでは、歴史的建造物の意味と現代の景観への調和と意味について、三線道路を例に述べる。

（2）三線道路と歴史的建築

戦後62年を経た今日、日本統治時代の日本人が残した数多くの建築物の保存状態は概ね良好だが、街の道路の景観は様変わりした。台北に住む当時を知る人は、これも進歩の表れだと言う。後藤新平が台北旧城計画と文明について残した一つの言葉「趣味アル發達ヲ圖ルベキ事」は土木局に伝えたもので、後藤の台北城開発に力を注ぐ意気込みが感ぜられる。1895年「台湾建築部仮規則」の改正、1900年新市区に応じた規則「台湾家屋建築規則」の発布による家屋建築の細かな規定は、都市台北の更新計画近代化の門をくぐり抜け、文明の開発の中へと進んで行った。国外から特別に土木技術者を招き、新台北建築工事を計画した。台北城郭を崩し、40メートル幅の道路に拡張し、路線を三種類の異なった形式に作り変えた。中央に自動車専用道路、その側には台湾の樹木（ガジュマル、ビンロー、カタン、くば、楓、大王ヤシ）を植樹した緑地路、そして外側に自転車なども通行出来る歩道を作った。日本統治時代の名称で「三線道路」と呼ばれる模範的な当時の最新デザインである。三線道路に関しては当時の姿を記憶する人は数少なく、現在学会或いは文化人らの間で研究がなされている。

1909年、台湾総督府は台北市区再開発の名の下、帝国の壮大な計画のひとつとして大規模な土木事業を行った。三線道路は都市計画の中の最も主要な道路修築工程で、これは単なる三車線道路ではない、所謂先進的な道路工程工法デザインであり、伝統的な中国建築を否定した完全に欧米の文明的な現代建築の手法をとっている。台北市に残っている三線道路の形跡は、東西南北に広がる形で現在見ることが出来る。清国時代の旧台北城は堀に囲まれていた。北門から西門にかけ走っていた清国時代の鉄道は現在の中華路（西門町）、東門側に中山南路（台湾大学付属病院から圓山飯店）、南門から愛国東西路（中正紀念堂から南昌公園）、朝北方から忠孝西路（台北郵便局から行政院）にかける四大方向は、ちょうど正方形型に設計計画され、現代都市計画の観点から見ても、当時の台北三線道路設置は確実に斬新な設計工法であり、新台北城百年の建設の基礎となった。

台北市は過去から現在にわたって、否応無しに日本統治時代の日本人によって経営され、台北の新しい故郷（三線道路）は過去の栄光と化し、先人達の血と涙の開拓史であった。三線道路は旧台北城解体後、大日本帝国植民地の象徴となっていたが、現在では台北城門とともに、形を変えても本来あった場所に残ったまま全台湾の政治経済の中心となっている。先人達の開拓した跡は過去のものとなり繁華街の中に溶け込んでいった。三線道路は近代台湾100年来最も優れた時尚的に計画されたデザインであり、近代台北の景観の鍵となった。

６月17日は、日本統治時代の台北城の大日本帝国始政日であり、また、現代の台北市の中華民国の記念日でもある。以前、旧台北城の周りには声高らかに「天皇陛下万歳」が叫ばれていたが、現在では「中華民国万歳」の声が聞こえる。複雑な心情ではあるが、これも時代の流れを反映している。日本統治時代に歌われていた歌に「台北小調」（ひとりしょんぼり　ガジュマル並木　月のかげさえ　待つ身に細く　まわるこころも　三線道路　飽きもあかれも　せぬ仲なれど）の歌詞は、台北の大空に満ち溢れるロマンティックな男女の情念を表している。(注3) 台北の三線道路には愛と涙、そして台湾の最も大切な人々の心がそこにある。

日本統治時代の総督府（図３）・現総統府（図４）は、正面を東向きに設計されており、日本が東方の虎（強者）であるという象徴で、太陽の帝国であることを意味する。かたや東門の背後にある国民党中央本部（元・赤十字会）の正門は西に向いており、西方の極楽世界を意味する。前中華民国総統・李登輝時代の2000年の大統領選挙で敗れ国民党は政権を失った（中央本部の建物は後に売却）。極楽に享楽したのが果たして敗北の原因なのか？　しかし、位置的には、左右に台北刑場（現在の蒋介石・中正紀念堂）と、もう一方にある関東軍基地（現・台湾大学付属病院）で形成されており、興味深い事に生老病死、復興と復建を表している。その周辺には、中山南路の総督官邸（現・台北賓館）、対面の外交部斜め角に総督府研究所（現・教育部）、更に日本統治時代の代表的な教会建築・幸町教会（現・済南教会）、隣の台北第二高等女学校（現・台湾立法院）、そのまた隣の知事公務室（現在は半壊した武功の監察院）、忠孝東路を跨いで台北市役所（現・行政院）、斜め向かいに総督府官舎（現・警察中正分署）、更に下って台北駅（現在も台北駅）、その正面には日本統治時代の台湾における最高の文化的聖地とも言える総督府博物館（現・台湾博物館）（図５・図６）、公園区には日本統治時代の放送局（現・二二八紀念公園）、その右側には台湾最高の女学校である台北第一高等女学校（現在も台北第一高等女学校）があった。

（３）三線道路と現在の景観

ここでは約100年前の三線道路の歴史的景観と現在の景観を提示し、景観の変貌と歴史的建

造物の現在の意味について述べる。図１は当時の台北鉄道大飯店前の景観で、図２は同じ場所で、現在の台北駅前の忠孝西路である。三線道路の緑地帯は全て取り除かれており、交通量の多い主要道路となっている。この道路にも歴史的建造物も現存しているが、この景観には見られず、ほとんどの建物が近代化されている。

図３は日本統治時代の総督府で、図４は現在の大統領総統府である。日本統治時代も現代も最高政策中心の象徴的建造物が同じ機能で使用されている。周辺には近代的建築物が増え時間的変遷を視覚的に感じ取られる景観となっている。図５は日本統治時代の博物館で、図６のように現代も博物館として使用されている。図４と同様に近代的建築物に囲まれ、歴史的変遷を見て取ることができる。図７は日本統治時代の逓信部と台北電話局で現在の長沙街である。これら２つの建物は現在も使用されており、左手の建物は中華民国交通部を経て国立国史館となっている。また右手の電話局は同じく中華電信局として使用されている。この景観では隣接する建築との調和が図られ、時間的な変遷を見ることができるが、視覚的要素は類似しており、違和感のない印象をもっている。

図１　日本統治時代の三線道路。当時の台北鉄道大飯店前。(楊孟哲所蔵ポスト・カード)

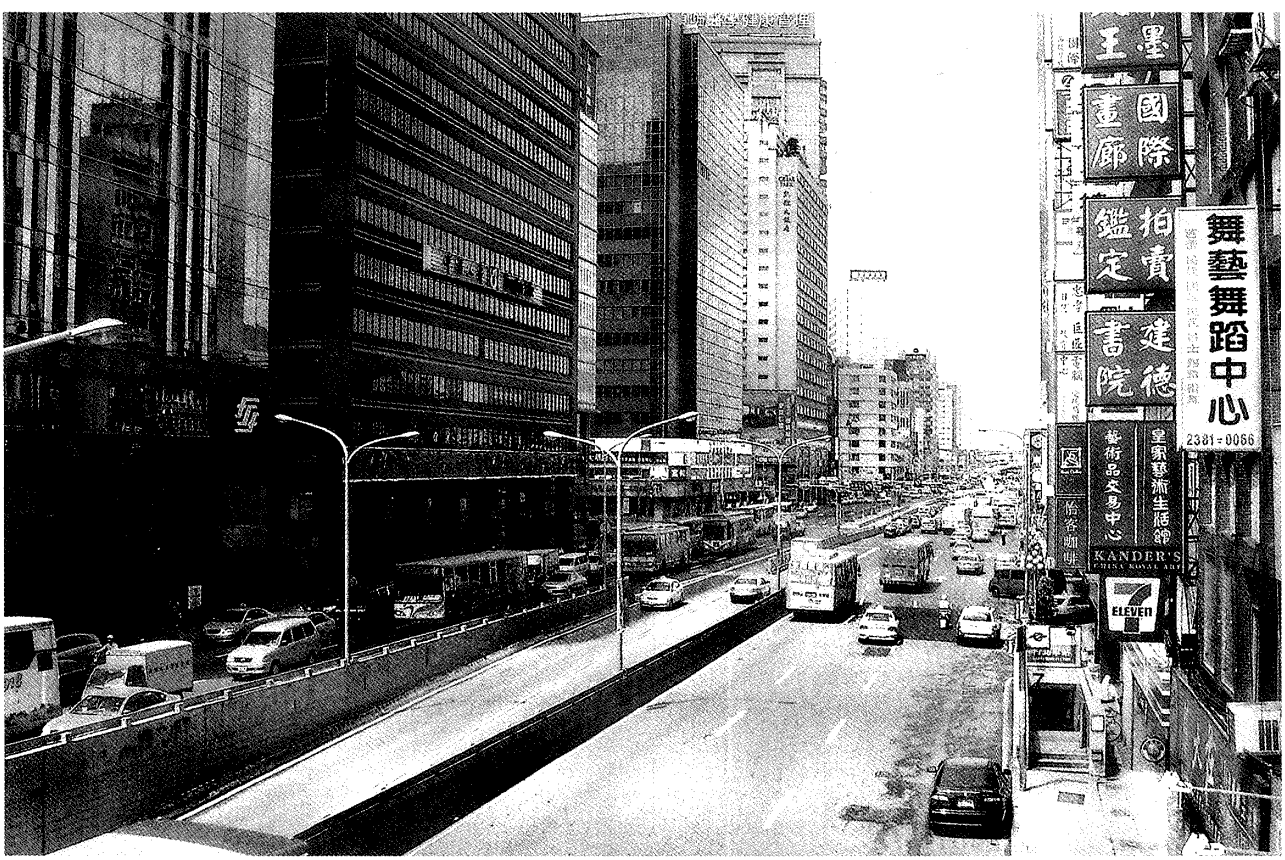

図２　現在の旧台北鉄道大飯店（現 Caesar Park Hotel）前。現台北駅付近の忠孝西路

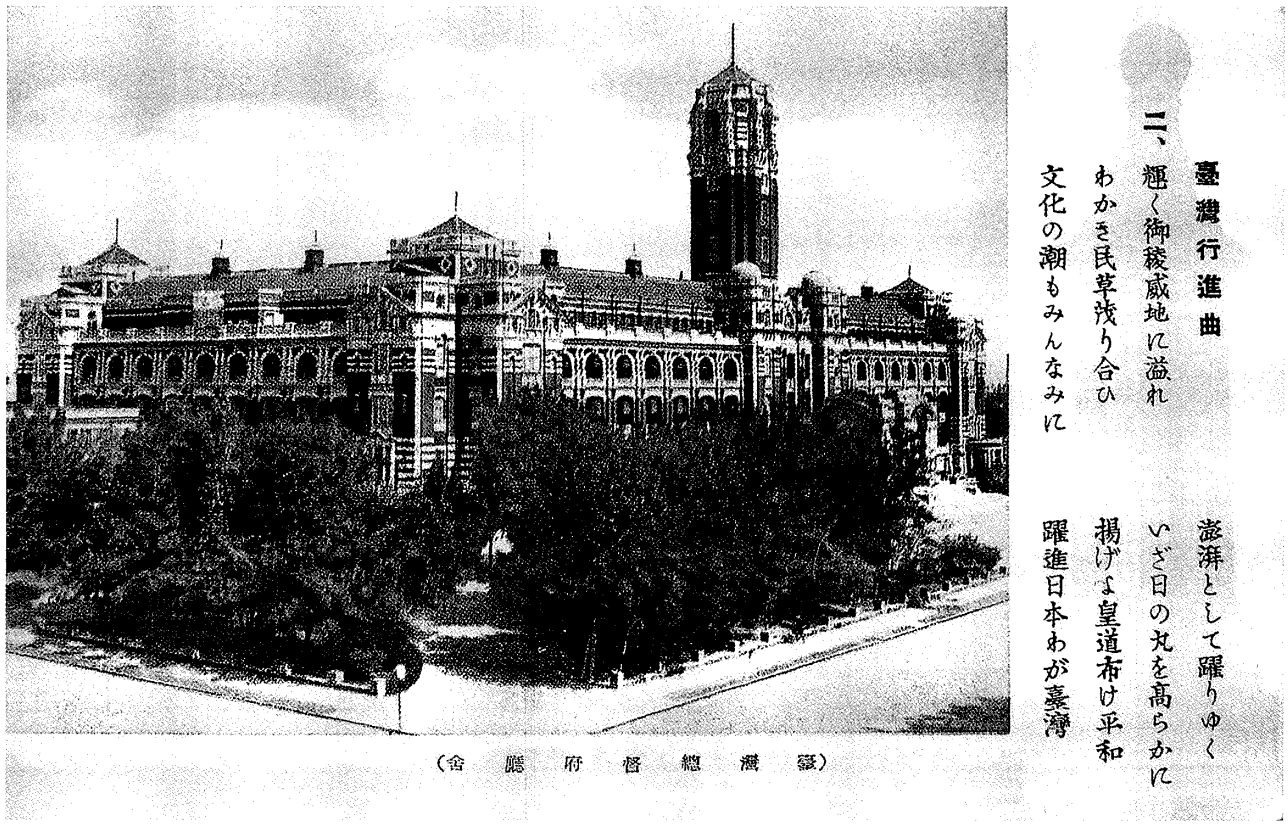

図 3　日本統治時代の総督府（楊孟哲所蔵ポスト・カード）

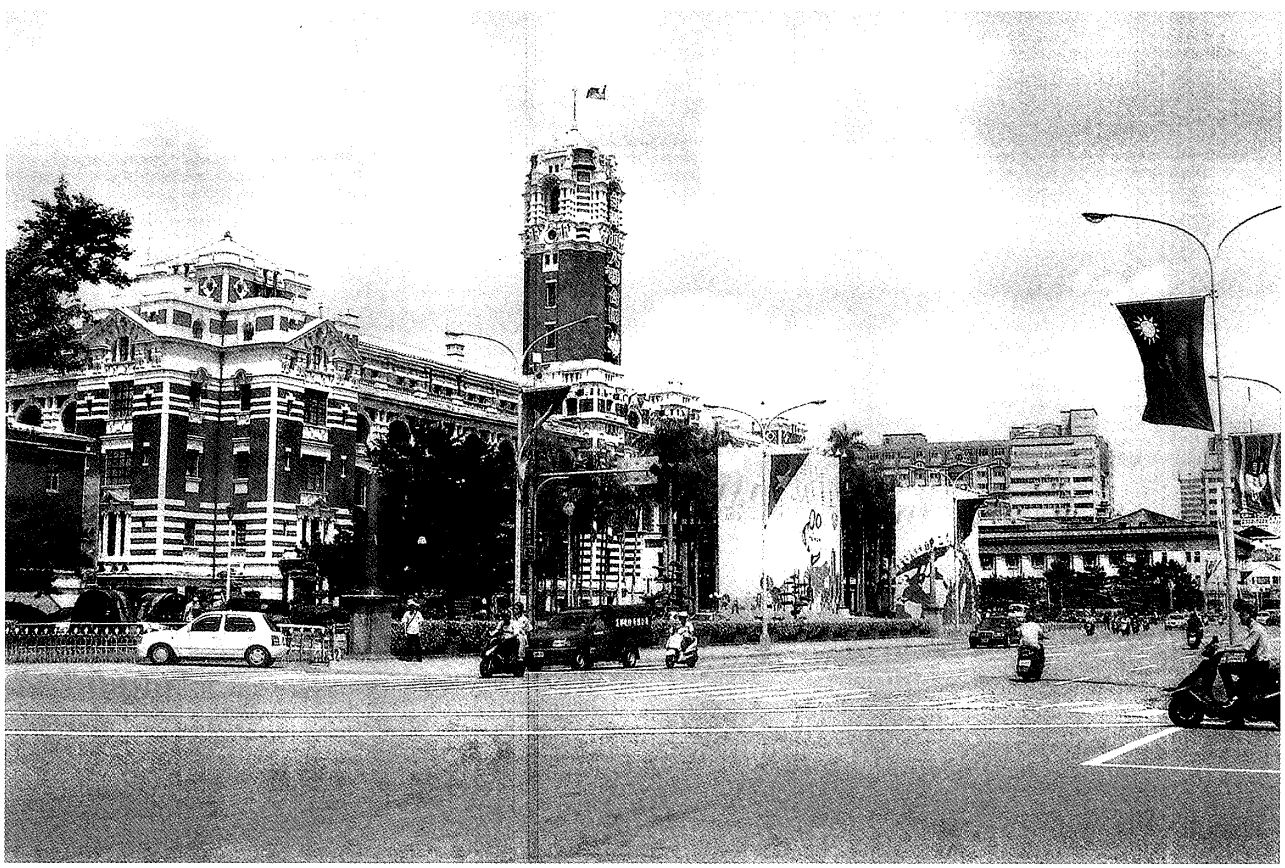

図 4　現在の大統領総統府

図５　日本統治時代の台湾総督府博物館（楊孟哲所蔵ポスト・カード）

図６　現在の国立台湾博物館

図７　日本統治時代の総督府逓信部（右）と台北電話局（楊孟哲所蔵ポスト・カード）

図８　戦後中華民国交通部を経て国立国史館（右）と中華電信局

3．広大な芸術区「北京798アート・ゾーン」

（1）はじめに

改革開放政策から20年余経過し経済発展が著しい中国。その首都北京に、現代美術の活性化と社会との積極的関連性を目的に設けられた広大な芸術地区がある。北京市の北東部に位置する朝陽区にある「北京798アート・ゾーン」は、21世紀中期に建設された既存の産業工場地区の跡地を活用し、画廊やアートスペースを始め、個人アトリエ、ブティック、広告デザイン事務所、ランド・スケープ事務所、撮影所、レストラン、バー等アートや観光に関する全ての活動がそこで行われている。その総面積は23万平方メートルに及ぶ。連日地元市民や欧米からのバイヤーや観光客で賑わいでいる。「798」とは工場番号のことで、この地区の代表的な建物の名から由来する。1950年代から建設された建物は、旧東ドイツのデザインを採用し、当時世界最先端のテクノロジーとバウハウスの設計理念を追求した。それらの建物は、冷戦当時、旧ソビエト連邦や旧東ドイツ等東側陣営への武器輸出や半導体製造を主軸とする国営軍事工場であったが、90年代に入り冷戦の終了と同時に変化してきた世界情勢によって、それら製造品の需要低下が原因で巨大な工場は閉鎖。その後、その建物に目を付けたアーティストやギャラリストらによる2002年からの本格的な参入により、その様相は変化している。現在、それらのアトリエやギャラリー、飲食店舗数は合わせて300を数える。

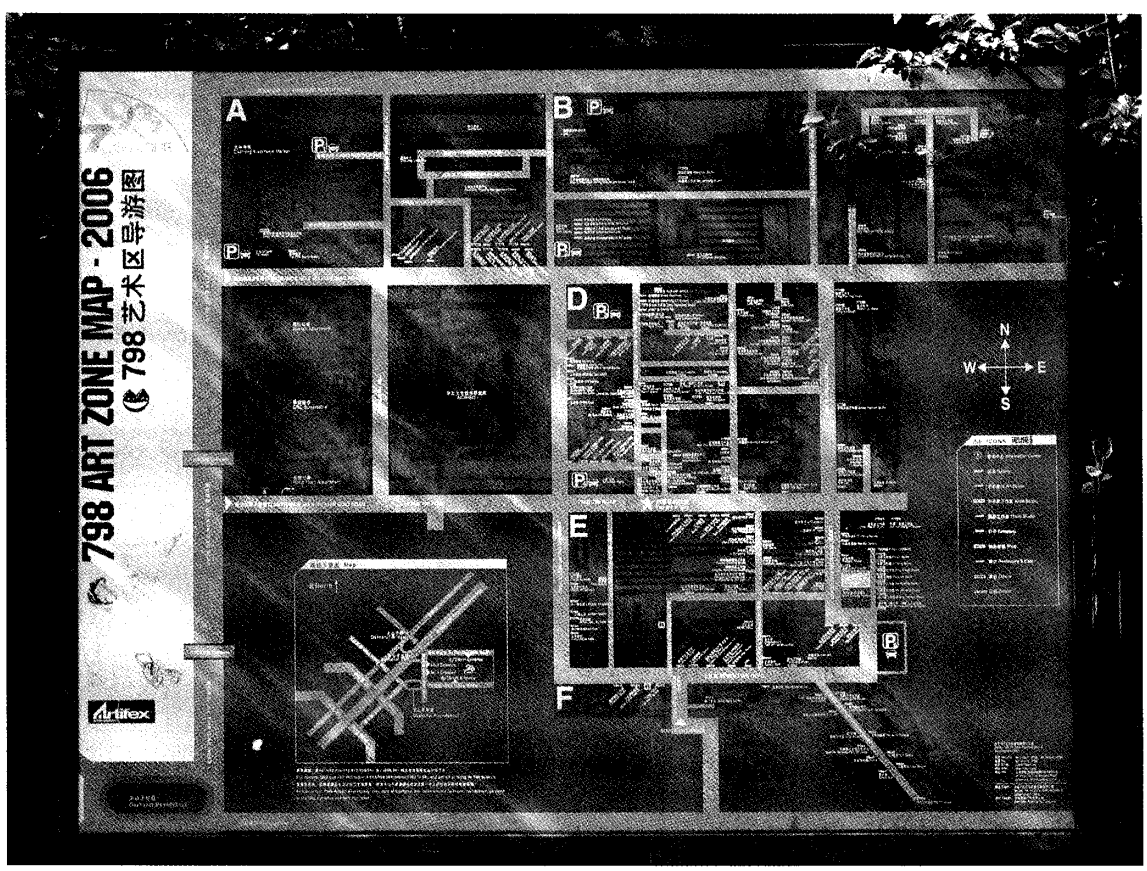

図9　北京798アート・ゾーンの案内地図

（2）歴史的背景

今日の北京798アート・ゾーンである朝陽区は、かつて中国共産党による第１回５ヵ年計画によって建設された北京北中国無線ジョイント装置工場（第718ジョイント・ファクトリー）が設置された場所であった。それは当時の首相周恩来によって批准され、党幹部の指導により旧ソビエト連邦と旧東ドイツの技術的援助を受け建設された。産業の基盤が全くなかった当時、ジョイント・ファクトリーは朝陽区酒仙橋路周辺で建造するように計画され、1954年から着工した。当時の指導者の懸命な努力により、国家建設当初では異例の迅速な工程で事業は進んだ。第718ジョイント・ファクトリーの基盤が整うと、第774や第738ファクトリー等次々に建設された。これらの工場はこの地域の環境を変えるだけでなく、中国の電子産業領域の歴史の先駆的役割を果たした。

旧東ドイツは、世界的な電子産業でのその主要な地位確立のために、テクノロジー、専門家、器材と製品ライン等自国のスタイルを中国に提供し、第718ファクトリーの建設に大いに貢献した。当時完成した第718ジョイント・ファクトリーは、自国旧東ドイツの中でもこの工場を越えるものはなかった。この規模の工場はソビエト連邦をはじめとする社会主義陣営諸国の中でも極めて異例な規模と設備であった。

ジョイント・ファクトリーは、バウハウスの合理主義を取り入れている。バウハウスは、1919年にクロピウスによってワイマールに建設された。抽象芸術の影響を受け、新しい種類の産業の芸術様式と構造様式を生み出した。主な特徴は、実質的な要求に応じ、技術的に新しい材料及び構造を併せ持つ美的な造形であり、シンプルなデザイン、柔軟かつ明快な構図が特徴である。これらの特徴に基づいてモダニズム建築物の新しいスタイルを構築した。そして、近代産業の要求に対応すべく、建築物の機能、テクノロジーと経済利益を強調した。ジョイント・ファクトリーは、実用性と簡潔さを組合せた、典型的なバウハウス・スタイルで構成された建物である。幾重にも連なる湾曲した高いボールト屋根と、特徴的なのは、従来、大部分の工場の窓は南側向きが主流であった当時、窓を北向きにすることにより、直射日光を避けた光線を均等に且つ安定性を維持する反射光線をフルに活用する設計を用いた。よって建物全面にやさしい一貫した光が降り注いだ。

その後2000年に第700、第706、第707、第718、第797と第798ファクトリーの６つの工場は再編成され、北京セブンスター・サイエンス＆テクノロジー社が管理統合した。セブンスター・グループは、電子都市自治区のと同様、北京の最初のハイテク企業のうちのひとつである。工場の一部の空いた施設の有効利用を打ち出し、利用者に安価で貸出した。中国でアート・ウェブ・ステーションを経営しているアメリカ人が、初めて120平方メートルのイスラム食堂を賃貸したのが2002年２月。後に、彼と共に多くの人々は、広大なスペースと安い使用料を活用し、次々と彼らの仕事やスタジオ、またはデモンストレーションスペースとして若干のワークショップを開催した。これが、「798アート・ゾーン」の始まりである。計画的に整然と立ち並ぶ工場やビル、中庭等個性的なデザインが典型的なモダニズム・バウハウス・スタイルであるため、多くのアーティストを引きつけ、徐々に芸術区が形成されていった。現在は、第798工場を中心に、第706、第707、第718、第797を含むエリアを「北京798アート・ゾーン」として段階的に再開発している。(注4)

戦争兵器製造工場が、現在平和的文化施設として生まれ変わっている。

図10　北向きの窓からは安定した光線が入る。

（3）活動内容と歴史的建築物活用の効果

現代中国芸術を牽引する「北京798アート・ゾーン」は、現在様々な活動を通して、世界的前衛芸術の共通認識を市民に提供すると同時に、中国社会に大きく文化的に貢献しようとしている。本格的なイベントとして、2005年４月30日から５月22日まで開催された、北京大山子国際芸術祭（Dashanzi International Art Festival）があり、日本と中国の若手メディア・アーティストのグループ展「Techno-Orientalism　東方主義電子藝術」などが挙げられる。中国の名立たる芸術家を多く排出している中央美術学院の学生らによる展覧会や、映画の上映、世界各国から招き寄せたアーティストや美術評論家らによる学術シンポジウム等あらゆる芸術活動がそこで行われている。

ボールト屋根の壁面には、大躍進と文化大革命を掲げた当時の「毛沢東語録」が赤い字で大きく書いてあるのは当時のままであるが、逆にこれが過去の歴史的状況を色濃く残しており、そのノスタルジックな空間が現代美術品をより効果的に高い水準に上げている。あるギャラリーは、展示空間の壁面にどっしりと構える冬用のボイラー管や機械的な開放弁をオブジェのように効果的に残している。おそらく以前は機械室であったのであろう。しかし、以前の暗い機械室を全面に白く塗り、空調を快適に整え、ライティングに工夫を凝らした空間の中で、クラシック音楽がBGMに流れると、上級ギャラリーに一変する。更には、ある喫茶店など、以前の工場の容易に取り除けない金属部品、例えば壁や天井から突き出た金属製の配管をそのまま椅子とテーブルの足や支えとして利用しいる。そこには、極力当時の状態をあえて残し、それらを利用することによって、歴史的過去の事象と現代的活動をシンクロさせる効果を見ることが出きる。そこに、歴史的建造物の再利用の新たな発想を見出すことができる。

体育館並みのフロアを展示スペースごとに区分けし、一直線に伸びる廊下から両サイドにギャラリーのショウ・ウィンドウを効果的に演出したり、レンガの工場の隣にガラス張りの展示室を設けることにより、過去と現代の関係を視覚的に演出した、歴史的建造物と現代の建造物との調和を考えたものも数多く見受けられる。(図11)

図11　ガラス張りの現代的なギャラリー。左横はレンガ造りの元工場。

現在、朝陽区の行政とセブンスター社、798アート・グループは、建築管理事務所をつくるため互いに結び付いている。科学と芸術を強化し、管理と効果的サービスを標準化した。双方の共同の努力で、作られた「創造的で文化的な公園」としての「北京798アート・ゾーン」。芸術の推進、優れた美術品の制作、競売業務を産業的にグレード・アップすることを進め、構造に優れたプラットホーム公園としての魅力を示し、「798」をブランドとする芸術や、その影響、文化的な特徴と創造的な産業をメインとして、世界に通用する高水準な文化的で創造的なインダストリアル・パークを目指している。

4．まとめ

前章までに、歴史的建造物の景観教材の例として、台北の三線道路における景観と北京798アート・ゾーンについて述べた。景観調査の教材としての対象は、視覚的要素を重視した分析が多い。デザインの教材として視覚的要素を重視する景観調査は、再構成をする場合に有効である。本稿ではこうした視覚的要素による景観調査に加えて、歴史的建造物の調査のための教材例を取り上げた。歴史的建造物が混在した景観は、現在では建造物の保護の観点から増えてきているといえる。そうした古いものと新しい物とが混在する景観を美術教育の教材として取

り扱うことは、次のような意義があると考えられる。
①景観調査の教材に視覚的要素だけでなく、歴史的経緯を見出す。
②視覚的要素と歴史的な意味を関連づけて考察する。
③歴史的建造物の再利用の発想を見出す。
④地域の歴史的建造物を再認識する。
⑤歴史的建造物と現代の建造物との調和を考える。

以上のような意義があると考えられる。こうした景観調査は中等教育段階では、総合的な学習の時間との連携によって、地域学習の一つとして有意義であると考えられる。実際に、シンガポールの2000年以前の教育課程における教材では、シンガポール市内の様々な歴史的建造物の地図作りとそれぞれの建造物の鑑賞という主旨で教材がなされていた。(注5)

環境教育、地域教育などの現在の教科にはない学習領域を、美術教育の景観調査ということでその一部が対応できると考えられる。

付記

本稿の作成に当たり、はじめに、1を福田、2を楊、3を上原が執筆し、4と全体構想を福田と上原が担当した。

注

（1）芦原義信　「街並みの美学」　岩波書店同時代ライブラリー　1990　pp.45-145
（2）福田隆眞　「一の坂川の景観と視覚的要素について」　山口大学教育学部研究論叢43巻第3部、1995
（3）又吉盛清　「台湾　近い昔の旅　台北編―植民地時代をガイドする」　凱風社　1996
（4）北京798藝術區 HP　http://www.798art.org/AboutUs.asp
（5）Art for Secondary One ,Curriculum Development Institute of Singapore,Ministry of Education Singarpore,Federal Publications,1986.　及び Art for Secondary One, Curriculum Development Institute of Singapore, Ministry of Education Singarpore, Federal Publications, 1987.

参考文献

1）楊孟哲　「台湾歴史影像」　芸術家出版社　1996
2）李乾朗　「台湾建築史」　雄獅図書出版社　1986
3）謝森展　編著　「台湾回想」　創意力文化事業　1997
4）「台湾歴史散歩」　遠流出版公司　1992
5）矢内原忠雄　「帝国主義下の台湾」　岩波書店　1934
6）藤森照信　編著　「東亜近代都市と建築全調査」　筑摩書房　1996
7）後藤新平　「日本植民地政策一班」　拓殖新報　大正10年
8）「日本地理風俗大系」　台湾編第15巻　新光社　1931
9）今芸術　ARTCO　8月号　2007